



Title	コリマ・ユカギール語の「迂言的過去」
Author(s)	長崎, 郁; Nagasaki, Iku
Citation	北方言語研究, 12, 167-183
Issue Date	2022-03-20
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/101901">https://doi.org/10.14943/101901</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/84897">https://hdl.handle.net/2115/84897</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_Ngasaki.pdf



## コリマ・ユカギール語の「迂言的過去」

長崎 郁  
(名古屋大学)

キーワード：コリマ・ユカギール語、迂言的過去、動詞の名詞化、言語接触、エウエン語

### 1 はじめに

コリマ・ユカギール語のクリティック *ben* は節を名詞化する機能をもつ。また、「動詞 + *ben*」はコピュラ動詞や述語標識を伴って主節の述語となり、しばしば過去の出来事を述べる際に用いられる。そのため、Maslova (2003a) はこれを迂言的過去 (periphrastic past) と呼んでいる。本稿ではこの「動詞 + *ben*」の述語用法について共時的・通時的な観点から考察を行う<sup>1</sup>。

本稿の構成は次のとおりである。まず、第 2 節において、*ben* による節の名詞化の概要を示す。第 3 節では、「動詞 + *ben*」が述語として用いられた際の文構造を記述する。第 4 節では、「動詞 + *ben*」がテキストにおいてどのような場合に使われているかを報告した後、時間的な前後関係に注目すると過去を表すことが多く、また過去を表すために使用されることが次第に増えてきていることを示す。第 5 節では、*ben* との類似性が指摘されてきた、同系のツンドラ・ユカギール語の *rukun* について見る。第 6 節では、述語用法の「動詞 + *ben*」の使用に近隣の諸言語、特にエウエン語が影響を与えた可能性のあることを述べる。

### 2 *ben* による名詞化

クリティック *ben* (母音の前で *bed* となる) は動作名詞 (-*l*)、*je* 分詞 (-*je/-d'e/-t'e/-j*)、*me* 分詞 (*me* 分詞の標識については後述) という 3 種類の動詞屈折形に後続し、その動詞の表す状況の参与者 (項) を表す。これらの動詞屈折形はいずれも語彙的名詞を主要部とする関係節を形成する機能をもつ。以下の (1a) は *je* 分詞に *ben* が後接した例、(1b) は *je* 分詞に名詞 *šoromo* 「人」が後続した例である<sup>2</sup>。

<sup>1</sup>本稿は日本学術振興会による助成 (#19K00564、#20K00619、#20H01260、#21H04346) を受けて行った研究の成果である。

本稿で示した聞き取りによる作例は、ロシア連邦マガダン州スレドニエ・カンスク地区セイムチャンとコリムスコエで 1997 年から 2007 年に行った現地調査において、故 Agaf'ja Grigr'evna Šadrina 氏と Dar'ja Petrovna Borisova 氏のご協力により得られたものである。ここに記して深く感謝申し上げる。エウエン語に関する貴重な情報を提供して下さった風間伸次郎氏にもお礼を申し上げる。本稿は北方言語学会第 4 回大会での口頭発表の内容を元にしており、その際に貴重なコメントをくださった方々にもお礼を申し上げる。また、有益なコメントを下された 2 名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。言うまでもなく、本稿に誤りがあればそれは筆者の責任である。

<sup>2</sup>表記には次の文字を使う：/p, t, s, š, t' (s', s), k, q, b, d, ž, d', g, h, r, m, n, n', ŋ, l, l', w, j, i, e, a, o, u, ö/. 長母音はマクロン (ˉ) で示す。資料として用いた文献からの引用の際には、原典の表記を可能な限りこの表記に合わせる。

グロスでは次の略号を使用する：ACC: accusative, AFF: affirmative, AN: action nominal, CAUS: causative,



- (4) a. t'ā-jōn  
be.few-JPTCP=NMLZ  
「少し」(Elicited)
- b. t'a-je=bon  
be.few-JPTCP=NMLZ  
「少し」(Jochelson 1900)
- (5) a. tātmie-d'ōn  
be.like.that-JPTCP=NMLZ  
「そのようなもの」(Elicited)
- b. tatme-d'e=bon  
be.like.that-JPTCP=NMLZ  
「そのようなもの」(Jochelson 1900)
- (6) a. iŋli-t'ōn\*<sup>4</sup>  
be.fearful-JPTCP=NMLZ  
「熊(恐ろしいもの)」(Elicited)
- b. iŋli-t'e=bon  
be.fearful-JPTCP=NMLZ  
「熊(恐ろしいもの)」  
(Jochelson 1900)

*ben* によって形成された節は、名詞句と同様に格をとる(格標識の前に複数標識が現れることがある)。*ben* に先行する動詞には、結合価、アスペクト、時制(「非未来(無標)」対「未来(-te/-t)」、否定といった文法範疇が示されうる。また、*me* 分詞標識には主語の人称・数が示される(-*me* [1SG]、-*me* [2SG]、-*mele/-mle* [3SG]、-*l* [1PL]、-*met* [2PL]、-*ŋile* (< -*ŋi-mele*) [3PL])。

- (7) *ile-pul* [qojl **lejdī-jōn-pe**] [qojl-ŋin **n'ās'ā-nu-l=ben-pe**]  
some-PL god know-JPTCP=NMLZ-PL god-DAT pray-IPFV-AN=NMLZ-PL  
mon-nu-l'el-ŋi  
say-IPFV-PL:IND.INTR.3  
「何人かの者たち、神を知っている者たち、神に祈る者たちは言った」  
(Maslova 2001:140, cited in Maslova 2003a:427)
- (8) [**omo-t'ōn**] nuk, - mon-i, - [bojt'e  
be.good-JPTCP=NMLZ find(-IMP.2SG) say-IND.INTR.3SG completely  
**el=šāšahaj-te-j=ben**].  
NEG=tear:PFV-FUT-JPTCP=NMLZ  
「良いの [良い袋] を見つけれ、(彼は) 言った、絶対に破れないのを」  
(Nagasaki 2015:21)

<sup>4</sup>聞き取り調査では、*je* 分詞標識と *ben* が融合しない *iŋli-t'e=ben* [be.fearful-JPTCP=NMLZ] も可能であるとの証言が得られている。

- (9) d'e pieter berbekin leme-n [nādaŋō-d'ōn-gele]  
 INTJ Pierte Berbekin what-GEN be.necessary-JPTCP:NMLZ-ACC  
 [ket'i-te-mle=ben-gele] t'umu ket'i-m  
 bring-FUT-MPTCP.3SG=NMLZ-ACC all bring-IND.TR.3SG

「ピエテル・ベルベキンは何か必要なものを、彼が運んで来るはずだったものをすべて運んで来た」(Nagasaki 2015:51)

名詞化の結果、表される参与者(項)のタイプには、先行する動詞屈折形ごとに傾向、あるいは制限がある。次ページの表1は、この点に関して聞き取りによる作例と、現代語資料中の例をまとめたものである。たとえば、主語(S/A)を表す場合は動作名詞かje分詞が用いられ、me分詞は用いられない。目的語(O)を表す場合はいずれの形式も用いられるが、me分詞が用いられることが多い<sup>5</sup>。

名詞化された節中の主語および目的語の格標示は、主節のそれとは若干異なる。まず、主語も目的語も3人称の場合、主節であれば目的語は対格または具格をとるが、(10)のように、名詞化節では同じ条件下で目的語が主格(ゼロ)となることがある(上掲の(7)も参照)<sup>6</sup>。また、主語は主節では主格(ゼロ)をとるが、名詞化節では、(11)のように、属格をとることがある。

- (10) a t'eslā-le titāt [šowhorā loškarā  
 and(Rus.) adze-INS like.this wooden.plate wooden.spoon  
 ā-mele=bed-e], taŋ t'eslā-le t'ine-m, tī=ben-de-jle,  
 make-MPTCP.3SG=NMLZ-INS that adze-INS chop-IND.TR.3SG here=NMLZ-POSS.3-ACC  
 jowho-de-jle.  
 back-POSS.3-ACC

「(彼は)手斧でこんな風に、皿とスプーンを作ったやつで、手斧で叩き切った、(彼女の)ここを、(彼女の)背中を」(Nagasaki 2015:12)

- (11) e-e, mon-d'e [aŋd'e-de jou-l=ben-pe-ŋin], [eris'  
 INTJ say-IND.INTR.1SG eye-POSS.3:GEN be.ill-AN=NMLZ-PL-DAT badly  
 juō-l=ben-pe-ŋin] met omo-lot-nunnu.  
 see-AN=NMLZ-DAT 1SG be.good-CAUS-HBT(-IND.TR.1SG)

「ああ、(私は)言った、目の悪いものたちのために、よく見えないものたちのために、私は(目を)治してやったと」(Nikolaeva 1989-1:98, cited in Maslova 2003a:426)

<sup>5</sup>それぞれの動詞屈折形がどのような項あるいは付加詞を関係節化することが多いか(Maslova 2003a, Nagasaki 2013)ということと相関するようである。

<sup>6</sup>主節における目的語の格標示は、主語の人称と目的語の人称の組み合わせや、目的語の性質によって決まる。主語が1人称・2人称で目的語が3人称であれば、目的語は主格(ゼロ)をとり、そうでなければ、対格 -gele/-kele, -ul あるいは具格 -le/-e のような明示的な格標識を伴う(Krejnovič 1982:245-248, 253-256, 260-262, Maslova 2003a:325-338, Nagasaki 2011:237-238, 長崎 2014)

表1 *ben* による参与者（項）の名詞化

屈折形	参与者（項）	動詞語幹
動作名詞	S	<i>ann'e</i> -「話す」、 <i>aŋd'e-n'</i> -「目をもつ」、 <i>ed'</i> -「生きている」、 <i>eguzu</i> -「歩く」、 <i>ewre</i> -「歩く」、 <i>kebej</i> -「去る」、 <i>kelu</i> -「来る」、 <i>kude</i> -「なる」、 <i>l'e</i> -「いる、ある」、 <i>lebie-n'e</i> -「土地をもつ」、 <i>leg-ō</i> -「食べられる」、 <i>loŋdo</i> -「踊る」、 <i>modo</i> -「座っている、暮らす」、 <i>mon-ō</i> -「言われる」、 <i>n'an'u</i> -「罪である」、 <i>n'ās'ā</i> -「祈る」、 <i>nādaŋō</i> -「必要だ」、 <i>ninjie-n'e</i> -「心をもつ」、 <i>noj-n'e</i> -「足をもつ」、 <i>nugen-n'e</i> -「手をもつ」、 <i>nume-n'e</i> -「家をもつ」、 <i>palā</i> -「助かる」、 <i>pierinzā-n'e</i> -「背びれをもつ」、 <i>pon'ō</i> -「残る」、 <i>qon</i> -「行く」、 <i>qoqsi-n'e</i> -「蹄をもつ」、 <i>sile-n'</i> -「強い」、 <i>t'omō</i> -「大きい」、 <i>t'uŋže</i> -「考える」、 <i>terike-n'</i> -「妻をもつ」、 <i>todī-n'e</i> -「歯をもつ」、 <i>ud'il-n'e</i> -「爪をもつ」、 <i>uneme-n'</i> -「耳をもつ」、 <i>unmu-n'e</i> -「角をもつ」、 <i>ō</i> -「～である（コピュラ）」、 <i>šaqal'e</i> -「集まる」、 <i>šašqul-n'e</i> -「指をもつ」、 <i>ūj</i> -「働く」
	A	<i>juō</i> -「見る」、 <i>ket'i</i> -「運んでくる」、 <i>mid'</i> -「取る、得る」、 <i>niede</i> -「呼ぶ」、 <i>qamie-d'e</i> -「助ける」、 <i>qaŋi</i> -「追いかける」、 <i>qon-to/qon-te</i> -「運ぶ」、 <i>t'emerej</i> -「終える」、 <i>ā</i> -「する、作る」
	O	<i>jodo</i> -「包む」、 <i>kudede</i> -「殺す」、 <i>leg</i> -「食べる」
	その他	【Sの所有者】 <i>is'e-n'</i> -「鋭い」、 <i>jou</i> -「痛い」、【場所】 <i>medū</i> -「聞こえる」
je 分詞	S	<i>aŋd'e-n'</i> -「目をもつ」、 <i>ed'</i> -「生きている」、 <i>embe</i> -「黒い」、 <i>erū</i> -「悪い」、 <i>ewre</i> -「歩く」、 <i>ikl'ō</i> -「硬い」、 <i>imi-n'e</i> -「首をもつ」、 <i>iŋerinmie</i> -「異なる」、 <i>iŋlū</i> -「恐ろしい」、 <i>jaqa</i> -「着く」、 <i>jerō</i> -「浅い」、 <i>jukō</i> -「小さい」、 <i>kejle</i> -「赤い」、 <i>l'e</i> -「いる、ある」、 <i>leg-ō</i> -「食べられる」、 <i>n'an'u</i> -「罪である」、 <i>n'užunō</i> -「貧乏である」、 <i>n'ās'e-n'</i> -「鋭い」、 <i>nādaŋō</i> -「必要だ」、 <i>nigejō</i> -「重い」、 <i>ninge</i> -「多い」、 <i>nono-n'e</i> -「幹をもつ」、 <i>nuō</i> -「笑う」、 <i>jōdaj</i> -「戻る」、 <i>omo</i> -「良い」、 <i>pad-ō</i> -「煮える」、 <i>piede</i> -「燃える」、 <i>pieri-n'e</i> -「翼をもつ」、 <i>pod'el'e</i> -「光る」 <i>pōŋō</i> -「孤児である」、 <i>qoqše</i> -「窒息する」、 <i>t'omō</i> -「大きい」、 <i>t'oŋū</i> -「甘い」、 <i>t'ā</i> -「少ない」、 <i>tenn'e</i> -「金持ちである」、 <i>titimie</i> -「このようである」、 <i>tātmie</i> -「そのようである」、 <i>uj-ō</i> -「作られる」、 <i>uōŋō</i> -「若い」、 <i>šaqale</i> -「黄色い」、 <i>šašahaj</i> -「破れる」、 <i>šibit'e-n'</i> -「ノイバラをもつ」、 <i>šoh-ō</i> -「入っている」、 <i>šā-n'e</i> -「木の生えている」
	A	<i>lejdī</i> -「知っている」、 <i>ā</i> -「する、作る」
	O	<i>jodo</i> -「包む」、 <i>morie</i> -「身につける」、 <i>ā</i> -「する、作る」
	その他	_____
me 分詞	S	_____
	A	_____
	O	<i>juō</i> -「見る」、 <i>kej</i> -「くれる」、 <i>ket'i</i> -「運んでくる」、 <i>leg</i> -「食べる」、 <i>lejdī</i> -「知っている」、 <i>mon</i> -「言う」、 <i>nou</i> -「糸に通す」、 <i>qarte</i> -「分ける」、 <i>qon-to/qon-te</i> -「運ぶ」
	その他	【道具】 <i>iŋli</i> -「恐ろしがらせる」、 <i>ā</i> -「する、作る」

## 3 「動詞 +ben」の述語用法の文構造

「動詞 +ben」が述語として用いられた際の文の構造は一様ではなく、「自動詞 +ben」となる場合のパターンが1つ、「他動詞 +ben」となる場合のパターンが2つある（Maslova

2003a:442-443)<sup>7</sup>。本節ではこの3つのパターンを見てゆく。

### 3.1 自動詞 +ben

自動詞が *ben* に先行する場合、自動詞はほぼ規則的に *je* 分詞形となり<sup>8</sup>、*ben* にはコピュラ動詞 (*η*)*ō-* または述語標識 *-(le)k/-ek* が続く。コピュラ動詞は主語と人称・数において一致する。述語標識が続く場合には、主語との一致は起こらない。コピュラ動詞と述語標識の使い分けは、通常の名詞述語文での使い分けと同じであり、①主語が1人称・2人称の場合にはコピュラ動詞が用いられる、②主語が3人称であっても、未来時制や推量などの文法範疇を明示的に示す必要のある場合にはコピュラ動詞が用いられる、③それ以外の場合、つまり、主語が3人称であり、かつ、未来時制や推量などの文法範疇を明示する必要のない場合には述語標識が用いられる、とまとめられる。また、*ben* には複数標識 *-pe/-pul* が続くことがある。以下は、この文構造を図式化したものである (VI は自動詞を、Agr は一致標識を、Se は名詞述語文の主語を表す)。

- (12) a. Se [VI+*ben*(-PL)] COP-Agr  
 b. Se [VI+*ben*(-PL)-PRED]

これは、自動詞の主語に相当する参加者を表す名詞化節が述語として埋め込まれた名詞述語文と言える。(13) と (14) に例を示す。

- (13) mit tudā [ochen' bedno **modo-jōn-pe** **ō-d'ili**  
 1PL before very(Rus.) poorly(Rus.) live-JPTCP=NMLZ-PL COP-IND.INTR.1PL  
 「私たちはかつてとても貧乏に暮らしていた」(Nagasaki 2015:75)

- (14) emej tozhe [tāt **jaqtā-nu-j=bed-ek**  
 mother also(Rus.) like.that sing-IPFV-JPTCP=NMLZ-PRED  
 「母もこんな風に歌ったものだ」(Elicited)

コピュラ動詞に *je* 分詞語尾と *ben* の融合形 *-d'ōd* が付き、さらに述語標識が続く例もわずかながら見られる。

- (15) [[ninge-j=de **uō-n'e-j=ben** **ō-d'ōd-ek**  
 be.many-JPTCP=EMPH child-PROP-JPTCP=NMLZ COP-JPTCP=NMLZ-PRED  
 「(彼には) たくさんの子供がいた」(Maslova 2001:139)

<sup>7</sup>Endo (2020) にも文構造に関する多少異なった分析がある。

<sup>8</sup>動作名詞形となった例がテキスト中に1例ある。

- (i) [ningel'id'e **n'ied'i-l=ben-pe-k**  
 many.times tell-AN=NMLZ-PL-PRED  
 「(彼らは) 何度も語った」(Maslova 2001:139)

## 3.2 他動詞 +ben

他動詞が *ben* に先行する場合、他動詞はほとんどの例で *me* 分詞形となっているが、*je* 分詞形となった例もわずかに見られる ((18)、および次節の (33) を見られたい)。また、*ben* には常に述語標識が続く (コピュラ動詞が続いた例はない)。1つ目のパターンは (16) のように図式化される。これは、(12) の「自動詞 +ben」のパターンと似ているが、名詞述語文の主語 (Se) とは別に、他動詞がその主語 (A) をもつ点で異なる (VT は他動詞を表す)。

## (16) Se [A VT+ben-PRED]

これは、他動詞の目的語に相当する参加者を表す名詞化節が述語として埋め込まれた名詞述語文と言える。(17) と (18) に例を示す。名詞述語文の主語 (Se) の位置に現れるのは、典型的には指示詞であり、これが発話の場面に存在するもの、あるいは談話の中ですでに言及されたものを受けていることにも注意されたい。

- (17) tuön [t'ät'ä perevododaj-mele=bed-ek], odul tite.  
 this.one elder.brother translate-MPTCP.3SG=NMLZ-PRED Yukaghir like  
 「これは兄が訳したのだ、ユカギール語に」(Nagasaki 2015:108)

- (18) tiŋ nume [met et'ie ā-jöd-ek].  
 this house 1SG father make-JPTCP:NMLZ-PRED  
 「この家は私の父が作ったのだ」(Elicited)

もう1つのパターンは (19) のように図式化される。

## (19) A O VT+ben-PRED

このパターンでは、*ben* に先行する他動詞がそれ自身の主語 (A) と目的語 (O) をもち、名詞化節が埋め込まれた名詞述語文と言うよりは、述語の形自体は名詞述語文と同じであるにもかかわらず、全体として他動詞文を形成しているように見える。(20) と (21) に例を示す。

- (20) qaja met tīne tet-ul t'ohoje-le ill'aj-me=bed-ek elō  
 INTJ 1SG earlier 2SG-ACC knife-INS rip.up-MPTCP.1SG=NMLZ-PRED TAG  
 「おや、私はさっきお前 (の腹) をナイフで引き裂いたのではなかったらうか」  
 (Nagasaki 2015:103)

- (21) tamun-gele t'ät'ä odul tite perevododaj-mele=bed-ek.  
 that.one-ACC elder.brother Yukaghir like translate-MPTCP.3SG=NMLZ-PRED  
 「それを兄がユカギール語に訳した」(Nagasaki 2015:108)

(20) と (21) において名詞化節が埋め込まれていないことは、目的語の格標示からも判断することができる。第2節の最後の段落で述べたように、目的語は、主節であれば対格または具格が要求される条件下で、埋め込み節では主格 (ゼロ) となることがある。しかし、(19) のパターンをもつ例はすべて、主節における目的語の格標示の原則 (\*6 を参照) に従っている。

#### 4 「動詞 +ben」の述語用法の使用

述語用法の「動詞 +ben」を Maslova (2003a:179-181) は迂言的過去 (periphrastic past) と呼び、描写された状況の時間が参照時間よりも前であることを強調するとしている。筆者自身も、長崎 (2001:63-66) において、「動詞 +ben」は発話時点からある程度離れた過去を表すとした。しかし、過去の出来事に対して「動詞 +ben」が必ず用いられるわけではない。コリマ・ユカギール語の定動詞の形態的な時制は「非未来 (無標)」と「未来 (-te/-t)」の対立であり、非未来は現在の出来事も過去の出来事も表しうるが、過去の出来事に対しては定動詞の非未来形を用いるのが普通である。一方、Maslova (2003a:181) は、「動詞 +ben」が過去の出来事を表さないこともあるとも指摘しており、確かにそのような例も存在する。本節では、まず、「動詞 +ben」の述語用法がテキストのどのような場面で用いられているかを示す。次に、時間的な前後関係という観点から見ると、やはり過去の出来事に対する使用が多く、しかもその使用頻度が次第に増えてきていることを示す。

##### 4.1 使用場面

テキストにおける使用から、「動詞 +ben」の述語用法には、「説明」「確信」「程度の甚だしさ」といった意味を読み取ることができる。また、内容疑問文に「動詞 +ben」が用いられることがある。

##### 「説明」

たとえば、テキストの冒頭でこれから語られる内容の背景となる情報を提示する際、また、ある出来事を述べる前後で、すでに生じていた出来事を付随する情報として提示する際に「動詞 +ben」が用いられることがある。以下の (22) はテキスト冒頭における例、(23) (24) は付随的な情報 (和訳下線部) を提示する例である。このような例における「動詞 +ben」は、聞き手へ話の流れの理解を促す「説明」のために用いられていると考えられる。

- (22) tudā tiŋ mieste-ge oqonas-tie tī [modo-jöd-ek anil promušl'aj-t  
before this place-LOC Afanasij-DIM here live-JPTCP:NMLZ-PRED fish hunt-ss  
parā-ge]. taŋ pulut [lige-je šoromo ō-d'öd-ek].  
time-LOC that old.man be.old-JPTCP person COP-JPTCP:NMLZ-PRED

「かつてこの場所にはアフアナシーが暮らしていた、魚を獲る時期に。その老人は年老いていた」(Maslova 2001:138)

- (23) šewr-ej-din l'e-j. šapadaŋil'-pe [joŋno-j=ben-pe-k].  
escape-PFV-PURP exist-IND.INTR.2SG door-PL be.open-JPTCP=NMLZ-PL-PRED

「(ピエテル・ベルベキンはその家から) 逃げようとした。ドアは開いていたんだ」

(Nagasaki 2005:48)

- (24) “Debegej, tet qodit qot kie-t’ek?” - mon-i. “met  
 Debegej 2SG why from.where come-IND.INTR.2SG say-IND.INTR.3SG 1SG  
 tet-ul jalhil-ge peššej-me=bed-ek.”  
 2SG-ACC lake-LOC throw-MPTCP:1SG=NMLZ-PRED  
 「デベゲイ、お前は どうして、どこから来たんだ？ - (彼は) 言った。私はお前を湖に投げ  
 込んだのに」 (Nagasaki 2005:17)

### 「確信」

話し手による出来事の実現に対する確信を表す際に「動詞 +ben」が用いられることがある。なお、このような例の「動詞 +ben」は過去の出来事を表していないことに注意されたい。また、このとき ben に先行する動詞に未来標識が現れることがある。

- (25) [tāt P’e-te-j=bed-ek]  
 like.that exist-FUT-JPTCP=NMLZ-PRED  
 「(彼女は) こんな風になるはずだった」 (Nikolaeva 1989-2:32)

### 「程度の甚だしさ」

述語の表す属性の程度が甚だしいことを表す際に「動詞 +ben」が用いられることがある。文中に naqā「とても」のような程度副詞が含まれることもあれば、そうでないこともある。後者の場合であっても、「ほかのものに比して」あるいは「期待に比して」のような、対比される前提を伴っていることを読み取ることができる。なお、このような例の「動詞 +ben」は、(27)に見るように、過去の出来事を表さないこともある。

- (26) “tet terike tā l’e-j,” - mon-i.  
 2SG wife there exist-IND.INTR.3SG say-IND.INTR.3SG  
 “[uöŋō-d’ōd-ek naqā].”  
 be.young-JPTCP:NMLZ-PRED very  
 「お前の妻はあそこにいた - (彼は) 言った。(彼女は) とても若かった (若返っていた)」  
 (Nagasaki 2005:20)

- (27) d’e omo-s’, tijj [[er-t’ōn] ō-d’ōd-ek].  
 INTJ be.good-IND.INTR.3SG this be.bad-JPTCP:NMLZ COP-JPTCP:NMLZ-PRED  
 「よし、(こっこの紐は) 良い、こっちは (全然) 駄目だ」 (Nikolaeva 1989-1:100)

### 「内容疑問文」

内容疑問文に「動詞 +ben」が用いられることがある。

- (28) qodit tudel [tāt kamen'-ŋōt kude-jōd-ek].  
 why 3SG like.this stone(Rus.)-ESS become-JPTCP=NMLZ-PRED  
 「どうして彼女はこんな風に石になってしまったのだろうか」(Nikolaeva 1989-2:10)

以上で見た「説明」「確信」「程度の甚だしさ」「内容疑問文」に対する「動詞 +ben」の使用は、ヨヘルソン資料でも確認することができる。以下の、(29)は「説明」、(30)は「確信」、(31)は「程度の甚だしさ」、(32)(33)は「内容疑問文」の例である。

- (29) ..., met emd'e el'e=ūše-ŋi-lek, [mit-ke  
 1SG younger.sibling NEG=touch-PL-PROH.2 1PL-LOC  
**el'e=l'e-je=bod-ek]** kuded'e-luke.  
 NEG=exist-JPTCP=NMLZ-PRED kill-DS  
 「...、私の弟に手を出さないでくれ、(彼は) 私たちのところにはいなかったんだ、(私たちが) 殺人を犯した時」(Jochelson 1900:154)
- (30) debegei monn-i: “qaqa, met igediene jondo-l'el-me. [amde-t  
 Debegej say-IND.INTR.3SG grand.father 1SG belt forget-INFR-OF.1SG die-ss  
**morie-te-me=bod-ek]**”  
 wear-FUT-MPTCP.1SG=NMLZ-PRED  
 「デベゲイは(老人に)言った - じいさん、(私は)自分のベルトを忘れてしまった。(私はそれを)死ぬ時にしなければならない」(Jochelson 1900:36)
- (31) t'umut mo-d'eil'i: “oil'e, [omo-t'e=bon] ŋo-l'el!”  
 all say-IND.INTR.1PL no be.good-JPTCP=NMLZ COP-INFR(-IND.INTR.3SG)  
 「(私たちは)皆言った、いいや、(これは)美味しい！」(Jochelson 1900:78)
- (32) tet [qot kie-t'e=bon'] ŋo-q?  
 2SG from.where come-JPTCP=NMLZ COP-INTERR.2SG  
 「お前はどこから来たのか？」(Jochelson 1900:52)
- (33) tuben [leme ā-je=bod-ek]?  
 this.one what do-JPTCP=NMLZ-PRED  
 「これは誰がやったのか？」(Jochelson 1900:5)

#### 4.2 「過去」に対する使用

このように、「動詞 +ben」の述語用法は単に過去を表すのではなく、その使用例から「説明」「確信」「程度の甚だしさ」「内容疑問文」のような意味を読み取ることができる。このような意味は何らかの文脈あるいは前提を受けたものであり、また語用論的な、つまり、話し手による命題内容の捉え方に関わるものであると言える。しかし、時間的な前後関係に注目すれば「動

詞 +ben」の述語用法はやはり過去の出来事に対して用いられることが多く、しかもその使用頻度が次第に増えてきている。表2は、「動詞 +ben」の述語用法の使用を現代語資料とヨヘルソン資料に分けて集計したものである。テキストのほとんどはかつて起こったことを語る民話や伝説、体験談であり、その地の文は自ずと過去の出来事を述べるものであることが多い。そのため、集計の際には地の文と台詞を分けた。テキストの総語数は、現代語資料が約 32000 語、ヨヘルソン資料が約 23000 語である。

表2 述語用法の「動詞 +ben」の使用状況

	過去 地の文	過去 台詞	現在・未来 台詞	合計
現代語資料 (20 世紀半ば～)	76	23	4	103
ヨヘルソン資料 (19 世紀末)	11	16	8	35

現代語資料でもヨヘルソン資料でも、「動詞 +ben」が過去の出来事に対して用いられた例がそうでない例よりも多いことはすでに述べたとおりである。しかし、現代語資料とヨヘルソン資料を比べると、現代語資料の方が地の文においても台詞においても過去の出来事に対して用いられた例が多い。特に、地の文における例の数は、現代語資料がヨヘルソン資料のおよそ 7 倍ある。前者が後者よりも約 1.4 倍の総語数であることを考慮しても差は明らかである。

過去の出来事に対する使用が多く、その使用頻度が増加しているのは何故なのかということを考える前に、これが語族に共通する変化ではなく、コリマ・ユカギール語独自のものであることを確認しておく。

### 5 ツンドラ・ユカギール語の「動詞 +rukun」

コリマ・ユカギール語と同系のツンドラ・ユカギール語には *ben* (< *bon*)、およびその語源となった名詞 *pen* (< *pon*) との同根語はない。しかし、*ben* と *pen* に対応する語として、Krejnovič (1958:31-36) は、*rukun* と *sukun* を挙げている。Maslova (2003b:50) は *rukun* を *sukun* の拘束形と呼んでいる。*sukun* は最も一般的には「衣服」を指すが、自然現象を表す動詞述語文の項としても用いられるという<sup>9</sup>。意味的に透明な軽名詞である点で *sukun* はコリマ・ユカギール語の *pen* と類似している。

- (34) mit ekia-ha            mit en'ie-n            **sukun**            l'e-te-l  
1PL elder.sister-LOC 1PL mother-GEN thing(-FOC) exist-FUT-SF

「私たちの姉のところに私たちの母の衣服があるだろう」

(Maslova 2001:12, cited in Maslova 2003b:58)

<sup>9</sup>ツンドラ・ユカギール語の辞書である Kurilov (2001:446) は、*sukun* の意味として、「衣服」「布」「土地」「空」「天気」「年」「世界・生活」「出来事」を挙げている。

- (35) **sukun** t'ahar-de-ha - me-pengej-te-jeŋ  
 thing freeze-POSS.3-DS AFF-return-FUT-IND.INTR.1SG  
 「地面が凍ったら、(私は) 戻ってくる」(Kurilov 2001:446)

拘束形の *rukun* は、動作名詞、*je* 分詞、*me* 分詞によって形成された関係節の主要部としての用法をもつ。これはコリマ・ユカギール語の *ben* の分布と共通する。

- (36) [tude **wie-te-l rukun**] nonol banda-ha  
 3SG:GEN make-FUT-AN thing snare put-IMP.1PL  
 「彼が調べに行くように罾を仕掛けよう [彼が行う仕事である罾を仕掛けよう]」  
 (Maslova 2001:9, cited in Maslova 2003b:66)

- (37) [**n'ijomie-je rukun-ek**] l'e-l  
 be.various-JPTCP thing-FOC exist-SF  
 「さまざまなものがある」(Maslova 2001:39)

- (38) [tet **nādi-me rukun**] me-ke-l-u-j  
 2SG need-MPTCP.2SG thing AFF-come-E-INTR(3)  
 「(お前は) お前が必要としていたものを得た [お前が必要としていたものが来た]」  
 (Maslova 2001:50, cited in Maslova 2003b:79)

*rukun* を主要部とする関係節構造は名詞述語文の述語としても用いられる。(39) と (40) は「自動詞 + *rukun*」の例、(41) は「他動詞 + *rukun*」の例である。

- (39) tude-je-de [t'uguo-d'e **rukun-ek**]  
 3SG-INTSF-TOP be.quick-JPTCP thing-PRED  
 「それは (飛ぶのが) 速かった」(Maslova 2001:30)

- (40) tuŋn'e [neme-lek **kon-n'e-j rukun-ek**?]  
 this.one what-INS person-PROP-JPTCP thing-PRED  
 「その主人は誰なのか? [それは何によって主人をもつものか? ]」(Maslova 2001:30)

- (41) emd'e-pul-gi [neme-ŋol-leŋ **el-wie-je rukun-ek**]  
 sibling-PL-POSS.3 what-be-ACC NEG-make-JPTCP thing-PRED  
 「彼らの弟は何もしなかった」(Maslova 2001:9, cited in Maslova 2003b:78)

本稿でツンドラ・ユカギール語の資料とした Maslova (2001) には、10 編のツンドラ・ユカギール語テキストが収録されており、述語用法の「動詞 + *rukun*」の例は 6 例である。これらの例とコリマ・ユカギール語の「動詞 + *ben*」の述語用法の例を比べると、まず、*rukun* に先行する動詞の形式が自動詞でも他動詞でも *je* 分詞形となっており、コリマ・ユカギール語のように自動詞は *je* 分詞形、他動詞は *me* 分詞形という使い分けがないことが挙げられる。また、10

編のテキスト中に6例ということは、述語用法の「動詞 +rukun」が、「動詞 +ben」に比べて、使用頻度の低い構造であることを示唆している。加えて、用例の少なさのため述語用法の「動詞 +rukun」がどのような意味機能をもつかははっきりしないが<sup>10</sup>、少なくとも過去の出来事を表すために多く用いられるということはない。したがって、コリマ・ユカギール語の *ben* とツンドラ・ユカギール語の *rukun* は、語彙の意味の希薄な名詞を起源とすること、関係節の主要部の位置に現れること、述語用法をもつという点で非常によく似ているが、述語用法の使用頻度、および過去の出来事に対する使用が多いか否かという点では大きく異なると言える。

## 6 エウエン語の分詞非未来形

「動詞 +ben」の述語用法は、おそらく、コリマ・ユカギール語が近隣の言語と接触し、影響を受ける中で発達してきたと考えられる。中でも注目されるのは、エウエン語東方言（以下、単に「エウエン語」と呼ぶ）の分詞非未来形の述語用法である。以下の表3は、Malchukov (1995, 2000) および風間 (2003) を参考に、エウエン語の定動詞（直説法）の非未来と過去、分詞の非未来と過去の標識をまとめたものである。なお、エウエン語の分詞 (participle) は、形動詞とも呼ばれるが、連体的機能のみならず、名詞化機能、述語（文終止）機能をもつ。

表3 エウエン語の定動詞および分詞の標識

	Malchukov (1995, 2000)	風間 (2003)
定動詞（直説法）非未来	-RA	-ra/-sa/-ta/-Ca/-a など
定動詞（直説法）過去	-Ri	--
分詞非未来	-Ri	-ri/-ri/Ci
分詞過去	-cA	-čA

風間 (2010:20) によると、エウエン語を含めたI群のツングース諸語における定動詞非未来形（風間 (2003, 2010) では定動詞現在形と呼ばれる）は現在の出来事に用いられるばかりでなく、過去の出来事にも用いられるという。これと関連して、Malchukov (1995:15, 2000:443) は、定動詞非未来形は限界 (telic) 動詞では過去を表し、非限界 (atelic) 動詞では現在を表すとしている。その一方で、風間 (2003:169) は、エウエン語においては分詞非未来形<sup>11</sup>が（主節の）述語として、過去の出来事を示すのにもっとも普通に用いられると述べている。Malchukov (1995, 2000) が、分詞非未来と同じ標識を定動詞過去としても認めているのはこのためであろう<sup>12</sup>。以下は、Malchukov (1995) で示された分詞非未来形の述語用法 (= 定動詞過去形) の例である。

<sup>10</sup> 先行研究にはこの点に関する記述はない。

<sup>11</sup> 風間 (2003, 2010) では形動詞現在形と呼ばれる。

<sup>12</sup> 風間 (2010:31) によると、I群のツングース諸語の多く（エウエンキー語、ネギダル語、ソロン語）で、エウエン語の分詞過去 -čA と同根の標識が一般的な過去を表す標識として定着しているという。また、風間 (2010:31) は、エウエン語中央・西方言の -čA にも、同じ方向への変化が起こったとしている。

- (42) Hupkuči-ŋsi-j                      d'uu-#-j                      hooč **gele-ri-w**  
 study-PAST.CVB-REF.POSS house-NOM-REF.POSS very miss-NONFUT.PTCP-1SG(POSS)

「(私は) 勉強している間、家がとても恋しかった」(Malchukov 1995:18)

- (43) Ora-r-#-san                      berge-l **bi-si-ten**  
 reindeer-PL-NOM-2PL fat-PL be-NONFUT.PTCP-3PL(POSS)

「あなたたちのトナカイは太っていた」(Malchukov 1995:20)

Malchukov (2013:182)によると、このような文は脱従属節化 (insubordination) を経て成立したものであり、そのプロセスは (44a) のように図式化されるという (Sb は主語を、Part は分詞を、V は動詞を表す)。つまり、(44b) のような、分詞を述語とし、内部に主語をもつ節がコピュラ *bi-* (ここでは存在動詞として用いられている) の項として埋め込まれた構造が出発点となり、コピュラの省略を経て、(44c) のように主節として再分析されたということである。

- (44) a. [Sb Part-agr.poss] [COP] → [Sb Part-agr.poss] ∅ → [Sb] [V-agr.poss]

- b. [Bej-il hör-ri-ten]                      bi-d'i-n.  
 man-PL go-NONFUT.PTCP-3PL(POSS) be-FUT-3SG

「その男たちはおそらく去った」

- c. [Bej-il hör-ri-ten].  
 man-PL go-NONFUT.PTCP-3PL(POSS)

「その男たちは去った」(Malchukov 2013:182)

エウエン語に見られる、現在と過去の両方を表しうる形式ともっぱら過去を表すための形式が存在するという状況は、コリマ・ユカギール語の定動詞非未来形と「動詞 + *ben*」の述語用法とが示す状況に非常によく似ている。第3節で示したように、コリマ・ユカギール語の「動詞 + *ben*」の述語用法の文構造は一様ではなく、名詞述語文と見なせるものも存在しており、エウエン語のような脱従属節化を想定することは難しい。しかし、両言語において名詞化した非未来時制の動詞が過去との結びつきを強く示すという点は注目に値する。

ただし、エウエン語の分詞非未来形の述語用法とコリマ・ユカギール語の「動詞 + *ben*」の述語用法とは、過去を表す形式としての定着の度合いという点で大きく異なっている。エウエン語に関しては、上述のように、風間 (2003:169) が過去の出来事を示すには分詞非未来形がもっとも普通に用いられると述べている。Malchukov (2000:444) は、実際に起こったことを語る際には分詞非未来形が基盤となるが、昔話を語る際には普通、定動詞非未来形が基盤となり、分詞非未来形は時折、注釈的な目的で用いられるのみであるとしており、ジャンルによる違いがあることを窺わせるが、いずれにせよ過去を表す形式としての分詞非未来形の定着の度合いはかなり高いようである。一方、コリマ・ユカギール語の「動詞 + *ben*」の述語用法は、純粹に過去を表す形式と見なすことはできない。

しかしながら、第4節で示したように、「動詞 + *ben*」はやはり過去の出来事に対して用いら

れることが多い。このような「動詞 +ben」の使用に見られる傾向は、同系のツンドラ・ユカギール語には見られない、コリマ・ユカギール語独自のものであり、エウエン語の分詞非未来形の述語用法による影響の可能性が高いと考えられる。加えて、エウエン語と並ぶコリマ・ユカギール語の接触言語であるサハ語およびロシア語がいずれも現在と過去の時制的対立をもつことも注目される。特に、19世紀末以降の過去の出来事に対する使用の増加の背後には、これらの言語からの影響もあったのかもしれない。

## 7 まとめ

本稿では、コリマ・ユカギール語の名詞化構造の1つである「動詞 +ben」の述語用法について、共時的・通時的観点から考察を行った。その結果、以下のことを明らかにした。

- I. 「動詞 +ben」が述語として用いられた際の文の構造は一様ではない。Maslova (2003a) が指摘するように、3つのパターンが存在する。1つ目は、自動詞主語が名詞化節が述語として埋め込まれた名詞述語文、2つ目は、他動詞目的語が名詞化節が述語として埋め込まれた名詞述語文、3つ目は、他動詞が名詞述語と同じ形式をとるにも関わらず、文全体としては他動詞文となるパターンである。
- II. 「動詞 +ben」の述語用法は先行研究において「迂言的過去」と呼ばれてきたが、過去の出来事だけでなく現在や未来の出来事に対しても用いられることがある。用例を観察すると、「説明」「確信」「程度の甚だしさ」といった意味を読み取ることができ、また、内容疑問文に「動詞 +ben」が用いられることもある。ただし、出来事の時間的な前後関係に注目すると、過去の出来事に対して用いられることが多く、また、19世紀末以降、その頻度が次第に増えてきている。
- III. 「動詞 +ben」の述語用法と対比されるような構造はツンドラ・ユカギール語にはない。
- IV. 「動詞 +ben」の述語用法が過去の出来事に対して多く用いられるということには、エウエン語の分詞非未来形の述語用法が過去を表すということが影響を与えた可能性が高い。また、その使用頻度の増加には、サハ語やロシア語といった現在と過去の時制的対立をもつ言語も間接的な影響を与えたと考えられる。

## 資料

- Jochelson, Waldemar (1900) *Materialy po izučeniju jukagirskogo jazyka i fol'klora, sobrannye v Kolymkov okruge*. St Petersburg. (Reprinted by Bičik in Yakutsk, 2005) .
- Maslova, Elena (ed.) (2001) *Yukaghir Texts*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Maslova, Elena (2003a) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Nagasaki, Iku (ed.) (2015) *Materialy po jazyku jukagirov verxnej Kolymy*. Tachikawa.
- Nikolaeva, Irina (ed.) (1989) *Fol'klor jukagirov verxnej Kolymy*, vol. I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.

## 参考文献

- Endo, Fubito (2020) Kolyma Yukaghir. In: Tasaku Tsunoda (ed.) *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance*, 333–362. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Jochelson, Waldemar (1905) Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist* 7: 369–424.
- 風間伸次郎 (2003) 『エウエン語テキストと文法概説』(ツングース言語文化論集 23) 大阪学院大学情報学部.
- 風間伸次郎 (2010) 「ツングース諸語の -ča について」『アジア・アフリカの言語と言語学』 5:17–34.
- Krejnovič, Eruxim A. (1958) *Jukagirskij jazyk*. Moscow: Nauka.
- Krejnovič, Eruxim A. (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Kurilov, Gavril N. (2001) *Jukagirsko-russkij slovar'*. Novosibirsk: Nauka.
- Malchukov, Andrei L. (1995) *Even*. München/Newcastle: LINCOM EUROPA.
- Malchukov, Andrei L. (2000) Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. In: Lars Johanson and Bo Utas (eds.) *Evidentials: Turkic, Iranian and Neighbouring Languages*, 441–470. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Malchukov, Andrei L. (2013) Verbalization and insubordination in Siberian languages. In: Martine Robbets and Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization: with Special Focus on the Transeurasian Languages*, 177–208. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Maslova, Elena (2003a) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Maslova, Elena (2003b) *Tundra Yukaghir*. Munich: LINCOM Europa.
- 長崎郁 (2001) 「コリマ・ユカギール語の名詞化辞 =ben –述語構成要素として用いられた際に見られる特徴–」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 4:60–67.
- 長崎郁 (2007) 「コリマ・ユカキール語の倚辞について」『アジア・アフリカの言語と言語学』 2:29–48.
- Nagasaki, Iku (2011) Kolyma Yukaghir. In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*, 213–256. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Nagasaki, Iku (2013) Relative clauses in Kolyma Yukaghir. 『アジア・アフリカの言語と言語学』 8:79–98.
- 長崎郁 (2014) 「コリマ・ユカギール語における名詞項標示」『北方言語研究』 4:19–31.
- Yap, Foong Ha, Karen Grunow-Hårsta and Janick Wrona (2011) Introduction: Nominalization strategies in Asian languages. In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Hårsta and Janick Wrona. *Nominalization in Asian Languages Diachronic and Typological Perspectives*, 1–57. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

## The Periphrastic Past in Kolyma Yukaghir

Iku NAGASAKI  
(Nagoya University)

This paper considers the predicative use of nominalization with the clitic *ben* in Kolyma Yukaghir, which is described as the “periphrastic past” construction in Maslova (2003a). The study points out the following in a synchronic as well as a diachronic perspective:

- I. As Maslova (2003a) describes, there are three sentence patterns involving nominalization with *ben* as a predicate: nominal sentences involving intransitive subject nominalizations, nominal sentences involving object nominalizations, and transitive sentences. In the latter pattern, although a transitive verb takes the predicative marker like a nominal predicate, the sentence as a whole exhibits the same properties as ordinary transitive sentences.
- II. These three patterns are used to describe not only past events but also non-past situations, accompanying certain kinds of semantic effects such as explanation, certainty, extremeness of degree and content question. However, the textual research represents the increase of the past tense use since the end of the nineteenth century.
- III. Another language of the Yukaghir family, Tundra Yukaghir, does not have a similar construction.
- IV. The predicative use of the nominalization with *ben* had probably been influenced by the nonfuture participle in Ewen, which functions as a finite (indicative) past-tense form. Moreover, *ben*'s recent increase in use can be considered as a result of the contact not only with Ewen but also with Yakut and Russian, which have an opposition between present and past in their tense system.

(ながさき・いく inagasaki@free.fr)

